

小学校音楽科における「思考を伴った試行錯誤」による「音楽づくり」(4)
— 文部科学省学習指導要領に示された音楽の構造と曲想や雰囲気に関する発言例に注目して —

新山王政和* 安藤朗広**

*音楽教育講座
**附属岡崎小学校

Elementary School Music-Making Activity Utilizing the Method of “Trial and Error with Thinking” :
A trial study focusing on the conversation about the structure of music and the mood of the music as indicated in the
Courses of Study

Masakazu SHINZANO* Akihiro ANDO **

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
** Okazaki Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan

要約

今回の一連の研究では、偶然性にのみ依拠した「音楽づくり(創作)」ではなく、自らが表したいイメージを定め、そのイメージに向かって試行錯誤しながら音楽づくりを創意工夫する活動を、南山大学附属小学校(河田愛子教諭)、春日井市立勝川小学校(小瀬木崇教諭)、附属岡崎小学校(安藤朗広教諭)で模索してきた。これらを通じて、子供達は「音楽の構造(音楽を形づくっている要素、音楽の仕組み)」を“知覚”することはできても、その知覚した要素と曲想や曲の雰囲気とを関わらせて“感受”することが極めて難しいことを確認している。そこで本報告では、次の2点を再度確認することを目的として検証を進めた。

- (1)鑑賞分野の実践に立ち戻り、改めて子供達の知覚と感受の関係性を明らかにするとともに、知覚した音楽の構造と曲想や曲の雰囲気とを、子供達はどのように関わらせているのか、その様相を明らかにする。
- (2)子供達が感じ取ることを困難とする音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との関わりについて、文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)』ではどのように位置づけられているのか、「同解説音楽編」の中から音楽の構造と曲想や曲の雰囲気に関する例示を抽出して整理することで、子供達から導き出したい知覚と感受の関係性について考えてみたい。

キーワード：音楽の知覚と感受 音楽の構造と曲想 音楽科授業

keywords : Music perception and sensitivity Music elements and atmosphere School music class

I, 研究の背景と今回の報告の目的

1, 研究の背景と課題

小学校の音楽科授業では「この曲で何を表現するのか、それを表現するためにどのように音を構成するのか」等のように、自ら課題特定・計画立案・課題解決と向き合う多様な経験を提供することで「生きる力」を育成することができる。さらに思考を伴う試行錯誤で創意工夫を深める音楽活動と構造化・再構築・更新される知識の獲得をめざした音楽活動とが、ともに子供に「音楽づくり(創作)」の活動へ興味関心を抱かせることを可能とし、自ら能動的に音楽に向かって学び続ける活動を構築することもできる。将来的にこれら

は論理的にものごとを考えるプログラミング的思考へ繋がる可能性をもっており、さらに教科の枠を越えたSTEAM教育にも発展可能であろう。

平成29年に告示された文部科学省『小学校学習指導要領音楽』では、音楽科の教科目標が「(1)曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2)音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。(3)音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。」と示されている。しかし

音楽科授業の現状では、「音楽の構造」(本報告では“音楽を形づくっている要素”と“音楽の仕組み”とする。以下同様)を子供へ理解させる活動や指導はどうすればよいのか、どのようにして子供達へ音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との関係に気付かせたり、その働きを感じ取らせたりすればよいのか、その方法は十分に追究されていない。

また文部科学省学習指導要領の「音楽づくり」の項目に「どのように音を音楽にしていくか(低学年)」「音を音楽へと構成することを通して(中高学年)」という記述があることから、その活動には表したい思いやその意図に向かって考えながら創っていくプロセスを大切にすることが求められていることは明白であろう。よって今回の一連の研究では、表したい思いやその意図に向かって、思考を伴った試行錯誤による創意工夫を積み上げていくことを核にした音楽づくりの活動モデルの開発と、その指導方法の模索を試みている。

2. めざしている音楽づくりのタイプ

手あそびうたや音楽ゲーム等の偶然性にのみ依拠した音楽づくりや、パソコンやタブレット上だけで音符を並べる音楽づくりでは、無思想的な活動に陥ってしまう危険性を否定できない。しかし文部科学省学習指導要領では「小学校音楽科・音楽づくり」の部分に「どのように音を音楽にしていくか(低学年)」「音を音楽へと構成することを通して(中高学年)」と記されていることから、今回の一連の研究では「表したい思いやその意図に向かって、考えながら音楽を創る活動」を模索してみたい。

3. 筆者が指定した音楽づくりの活動3段階

かねてより「活動あって学び無し」と指摘されてきた音楽科授業を改善するために、B. J. ジーマン「自己調整学習の理論」(北大路書房, 2006)及び M. テイト & P. ハック「音楽教育の原理」(音楽之友社, 1991)を参考にして、次に示す「音楽づくりの活動3段階」を指定している。

- (1)鑑賞で、音楽の構造と曲想の変化との関係を知覚し、醸し出される雰囲気を感じ取る段階。
- (2)表したい思いやその意図を考えてから、それを表現する音楽づくりに取り組む段階。
- (3)創った旋律を ICT 機器を用いて他者と共有し、冷静な自己評価と創意工夫の着眼点を得る段階。

4. 今回の研究実践の結果の骨子

今回の研究実践を経て得ることのできた結果の概要は次のとおりである。なお分析結果は 3.3 及び 3.4 で、考察は 3.5 において述べている。

- (1)“音楽の構造”に関する子供の発言は、強弱、速度、音色、リズムに関するものであり、旋律、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズは無かった。さらに“音楽の仕組み(反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係)”も無かった。

- (2)気付きやすい“音楽の構造”には偏りがあることから、様々な音楽活動の中で子供達に注目させて、気付かせたり感じ取らせたりする工夫が求められる。また“音楽の仕組み”は、わらべ唄や手あそび歌、音楽あそび等のプリミティブな音楽活動の中で、原体験として子供達を浸らせておくことが大切である。
- (3)「○○が△△したから、□□に感じた」や「□□な雰囲気は、○○が△△したから」等の音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との関わりを捉えた発言は、教師からの適切な問いかけや導きが無いと子供達だけの話し合いからは現れにくい。
- (4)具体的操作期以前の抽象的思考の発達段階にある子供には、板書化による議論の整理や視覚化が効果的であった。

5. なぜ思考を伴った試行錯誤によって創意工夫をしていくような「音楽づくり」をめざすのか

前述しているとおり、筆者による一連の研究では、偶然性にのみ依拠した音楽づくりや無思想的な音楽づくりではなく、表したい思いやその意図に向かって思考を伴った試行錯誤による創意工夫を積み重ねて「ねらいを定めてから音楽を創る」というタイプの活動をめざしている。その理由は文部科学省『小学校学習指導要領音楽解説編』第3章「各学年の目標及び内容」の(3)音楽づくりの事項に、ア「思考力、判断力、表現力等に関する資質・能力」に関する次のような記述があるからである。⁽¹⁾

[小学校第1学年及び第2学年の目標と内容]よりA表現(3)音楽づくりア(イ)解説編 p.44。

音を音楽にしていくとは、「第4指導計画の作成と内容の取扱い」2(8)イに示す、反復、呼びかけとこたえ、変化などの「音楽の仕組み」を用いながら、音やフレーズと関連付けて音楽にしていくことである。

どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつとは、試しながら音楽をつくる過程において、このような音楽をつくりたいという考えをもつことである。

II. 前報告までに確認している事項

1. 南山大学附属小学校の河田愛子教諭による実践を分析して得た結果の概要⁽²⁾

- (1)最初に作りたいイメージをしっかりと持たせてから音楽づくりの活動に入ることを大切にさせる。
- (2)つくった旋律の試奏だけを手がかりにするのは難しいため、ICT 機器の録音に残ったものを基にして工夫させると、思考を伴った試行錯誤に取り組みやすい。(モニタリングに有効)

- (3) ICT 機器を用いると録音再生を振り返りながら創意工夫することができるため、自分たちで目当てを設定しながら、効率よく音楽づくりの活動を深めることができる。(リフレクションに有効)
- (4) つくった児童も一緒に録音再生を聴きながらアドバイスをもらうため、他者との意見交流や共有が行いやすく、わかりやすい(共有・共通理解化しやすい)。
- (5) 最初はよいと思っていた旋律でも、録音再生を聴くことで自らが表したいイメージと異なっていると思いき直す場面が多かったことから、児童自身のモニタリングやリフレクションに繋がったと思われる。
- (6) 録音再生を活用することで演奏の技術レベルの制約が減じるため、安心して活動を積み上げやすくなる。(ストレスフリーに活動の足跡を残しやすい)
- (7) 旋律の出来栄だけを総括的に評価するのではなく、録音再生を通じたモニタリングとリフレクションにより活動のプロセスを形成的に評価することができていた。(自己評価が次の課題設定へと繋がる)
- (8) 児童の主体的な学びを求めるために教師から積極的に声を掛けたことが有効であった。さらに適宜知識の復習や技能に関するサポートを行うことが、その効果をより高めていた。

2. 春日井市立勝川小学校の小瀬木崇教諭による実践を分析して得た結果の概要⁽³⁾

- (1) 音楽に関する「知識」を単に暗記し知っているだけのものにとどめないためには、活動のプロセスを形成的に評価すべきである。
- (2) 既に児童は「思い=こうしたい」「意図=なんのために」を考えることはほぼ達成されていたが、音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との結び付きが不足していたことを踏まえて、「どのようにして」も含めて考えるようにさせたい。(方策)
- (3) 単に音や音符を並べただけの活動に陥ることなく、音の羅列が意味をもつ音楽として子供の中で絶えず鳴り響いているような活動を大切にしたい。
- (4) 「探求→それに必要なスキルや知識の習得→習得したものを試してみたい」→「活用している間に、さらによいものをめざして探求が深まる」のように、ステージを上げながら活動が深まり続ける「学びのサイクル」を活性化させたい。
- (5) 児童が思考判断をめぐらす活動と、その成果を表現し合う活動のバランスをとり、「(4)習得-活用-探求」の学びのサイクルを活性化させる。

3. 附属岡崎小学校の安藤朗広教諭による実践を分析して得た結果の概要⁽⁴⁾

- (1) 知覚できても感受に結びつかない。要素に気付いて知覚することはできても、要素の変化が何を醸し出

しているのか考えたりそのよさを感じたりする感受まで深めることが難しい。

- (2) 思考を伴った試行錯誤による創意工夫の継続。音の変化に気付いて知覚するだけでは「自分の感じ方」として捉えることができているため、実感を伴って体感することができず飽きが生じてしまう。
- (3) 板書による議論の視覚化が有効である。意見交換やアドバイス交換において、子どもの発言を拾い上げて板書することで全体での共有と共通理解化が図られ、議論の視点や思考の拡散を防いでいた。

4. これまでの報告で筆者が重視したこと

- (1) 音楽科における知識の整理が大切。
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の臼井学氏による整理が有効である。⁽⁵⁾

- ・外から入る知識：用語、作曲者、曲の背景など。本や教師の指導等でわかるようになるもの。子供が自分で考えて自然に理解できるものではない。音楽活動の文脈の中で教えることが大切。
- ・聴き取ることでわかる知識：音楽の諸要素やその要素の変化など。音と結びつけることで理解できる。
- ・感じ取ることでわかる知識：音楽の諸要素やその変化から多くの人が感じ取っていること。音楽活動の中で、要素の知覚と要素の働きの感受を結びつけることで理解が深まる。
- ・学習過程を経てわかる知識：既習の知識を子供自身が結び付け、組み立てることで、自分なりに理解が深まる。

- (2) 生きた知識として子供の中で積み上がる知識。

これまで積み重ねてきた音楽活動や音楽経験と照らし合わせながら既知の知識を自分なりに整理することで**構造化**し、それらがもつ意味やはたらき、それによる音楽的効果を思考したり判断したりすることで自分なりの嗜好や価値観へと高めていくことで**再構築**し、さらに様々な体験や活動を通じて考えたり確かめたりしながら**更新**していくものである。この「構造化され再構築・更新される知識」が子供の興味や関心を刺激し続けることで、思考を伴った試行錯誤による創意工夫を継続させる方策の一つになり得る。

- (3) 「音楽の仕組み」の活用に至らないことが問題。

“音楽の仕組み”を活用する発想が現れなかった理由として、低学年で行われてきたわらべ唄や手あそび歌、音楽あそびの活動において、「反復、呼びかけとこたえ、変化、(音楽の縦と横との関係：高学年)」等の“音楽の仕組み”を音や音楽を結び付けて体感させたり意識させたりする活動が希薄であり、レディネスが不足していたが考えられる。

Ⅲ. 今回の研究実践の報告

1. 附属岡崎小学校の安藤朗広教諭による実践

実践者が作成した指導計画を、筆者が整理した上で紹介する。注目すべき点は次の3点である。

- (1) 子供が聴きやすい3～5分の曲で、それぞれの雰囲気の違いを捉えやすい特徴的なものを実践者が27曲選んで子供達へ提示し、それを聴き比べることで「そうじの時間にふさわしい音楽」を考えさせた。
- (2) “音楽を形づくっている要素”の視点から楽曲を聴き比べながら、そうじの時間に適した曲を探させた。
- (3) 個に籠ってしまう一人学習ではなく、クラス全体で行う意見交換を活動の中心に置いていた。議論の際は、子供から出された意見を教師が音楽の要素を「キー（鍵）」として整理しながら板書して視覚化した。子供達は、視覚化された議論の足跡を見ながら他者の考え方を理解したり共有したりすることができた。

2. 研究実践の概要

「第3学年音楽科学習指導案」指導者：安藤朗広

(2018年5月～7月実施。34名在籍)

- (1) 単元：「音楽のとくちょうを感じ取るよ さがそうじの時間のBGM」
- (2) 目標：“音楽を形づくっている要素”の視点から楽曲を聴き比べ、求めるイメージに適した楽曲を探していくなかで、楽曲の与える雰囲気やそれをもとに抱くイメージが生活を豊かにしていくことに気付き、生活のなかの音楽にかかわっていくことができるようになってほしいと願った。
- (3) 実践者が想定した実践前の子供の姿と、単元構想時に想定した実践後の子供の姿

[実践前の子供の姿]

- ・ 他者のことを考え、自分から行動することができる子供。音楽が流れていることによさを感じたり、楽器の音色の特徴のよさを感じたりしている子供。

↓

[単元構想時に想定した実践後の子供の姿]

- ・ BGMに耳を傾けるなど、生活の中の音楽にかかわってこうとする子供。“音楽を形づくっている要素”によって作られる音楽のイメージや雰囲気が、生活の活力や心地よさにつながることに気付く子供。
- (4) 教材：雰囲気の違いを捉えやすい27曲の音源
 「モーツァルト：ホルン協奏曲第1楽章」「トリッチトラッチポルカ」「トランペット吹きの休日」「G線上のアリア」「プリンクプレクプランク」「テキーラ(お別れ会で演奏した曲)」「こいぬのワルツ」「ワシントンポスト」「動物の謝肉祭：白鳥」「マジックスライド」「リベルタンゴ」「クワイ河マーチ」「風笛：あすかのテーマ」「双頭の鷲の旗の下に」「アルルの女：メヌエット」「動物の謝肉祭：像」「ショパン：革命のエチュード」「メモリース・オブ・ユー」「気球に乗ってどこまでも」「口笛吹きと犬」「情熱大陸」「クラリネットポルカ」「私のお気に入り」

「愛の挨拶」「トランペット吹きの子守歌」「A列車で行こう」「ブルグミュラー：アラベスク」

(5) 授業の流れ (筆者による要約)

- 実践者が作成した「単元構想」(16時間完了)から筆者が主な活動のポイントを整理して紹介しておく。
- ・ 音楽が流れている場所を散策し、その音楽を使う意図をインタビューすることで音楽があるよさや音楽でどのような気分になるかを体感する。音楽によって楽しくなったり元気が出たり、音楽が気持ちや気分に関与しているものであることを意識する。
 - ・ 学校で音楽が流れている場所を想起することで、生活の至る所で音楽が使われていることを意識する。
 - ・ 音楽の特徴を感じて掃除の時間にぴったりの音楽を選ぶ。改めて学校で使われているBGMを聴く時間を設けることで、学校生活のBGMを見直す。
 - ・ イメージと音楽の特徴を結び付けることが大切だという考えを引き出す。
 - ・ 求める音楽のイメージと“音楽を形づくっている要素”を意識することで、雰囲気と音楽の特徴を繋げたり、音楽を聴き取る新しい視点をもったりすることができるようにする。
 - ・ 選択した曲を実際に掃除の時間に流して、選んだ音楽のよさや自分たちの追求のよさを実感する。
 - ・ 掃除の時間以外のBGMも考えることで、学んだことを生活に生かすことができるようにする。

3. 実践者自身による分析

実践者が「平成30年度1学期実践のまとめ」で記した「成果と課題」から抜粋引用する。

- ・ 全員で音楽を共有する機会を設けたことで“音楽を形づくっている要素”について共通理解を図ることができた。また全員が曲について知っている状態で関わり合うことができたため“音楽を形づくっている要素”を根拠とした考えの交流を行えた。
- ・ “音楽を形づくっている要素”からどう感じたのか、それを使ってどのような表現にしたいのかを、思いを具現化するための根拠として扱っていきたい。今回は、板書構成の際に「要素とイメージや印象の関係」という掃除に対する思いに繋ぐことができた。
- ・ 他者に向けての音楽、自分たちで心地よく感じたい音楽など音楽の形態は様々である。自分たちで楽しむ音楽では今回とは違った他者との関わり方が生まれると考えられる。音や音楽を介して様々な形での関わり方を模索していきたい。
- ・ 自分の考えにこだわりをもつほど、全体での考えの統一が難しくなってくる。児童が追求してきたことに成就感をもつことができるように工夫したい。

4. 筆者による分析

次に筆者による分析と所見を記してしておく。なお

本実践では、「音楽の構造」は主に“音楽を形づくっている要素”と“音楽の仕組み”を指している。

(1)5/18の授業記録より

「そうじの時間の音楽を聞いて思ったこと」

- ・総発言数:103
 - ・子供の発言数:78(76%)
 - ・教師の発言数:25(24%)
 - ・子供の発言と教師の発言の比率、3:1
 - ・音楽を形づくっている要素に関する発言数:25(32%)
 - ・音楽の構造と曲想や雰囲気に関する発言数:9(12%)
 - *授業内の議論を整理して話し合いの内容と足跡を可視化した板書記録は、文末2つ目の画像を参照
- [所見] 児童が自由に発言したため発言数が103と多く、子供と教師の発言数の比率も3:1になっている。つまり子供が3つ発言するたびに教師からの問いかけや確認が入っている。“音楽を形づくっている要素”に関する発言が全体の32%にあたる25もあるのに、音楽の構造と曲想や雰囲気に関わらせた発言は12%の9しかない。要素を知覚できていても感受に結び付けることができなかつたと思われる。

(2)6/14の授業記録より

「じょうねつたいりくを聞きながらそうじをして思ったこと」

- ・総発言数:54
 - ・子供の発言数:41(76%)
 - ・教師の発言数:13(24%)
 - ・子供の発言と教師の発言の比率、3:1
 - ・音楽を形づくっている要素に関する発言数:18(44%)
 - ・音楽の構造と曲想や雰囲気に関する発言数:11(27%)
 - *授業内の議論を整理して話し合いの内容と足跡を可視化した板書記録は、文末1番下の画像を参照
- [所見] 議論や意見交換が中心になったため発言数が54に減じたが、子供と教師の発言数の比率は3:1に保たれている。“音楽を形づくっている要素”に関する発言が全体の44%にあたる18もあり、音楽の構造と曲想や雰囲気に関わらせた発言も27%の11もあった。議論や意見交換を進める内に、知覚した要素の働きに気付いたり考えたりすることで、感受へ結び付けることができたと考えられる。

(3)7/11の授業記録より

「そうじの音楽を考えるときに大切なこと」

- ・総発言数:68
- ・子供の発言数:56(82%)
- ・教師の発言数:12(18%)
- ・子供の発言と教師の発言の比率、4:1
- ・音楽を形づくっている要素に関する発言数:19(34%)
- ・音楽の構造と曲想や雰囲気に関する発言数:7(13%)
- [所見] 総発言数が68だが、子供と教師の発言数の比率も4:1になっていることから子供の発言数の割合は全体の82%に増えている。“音楽を形づくっている

要素”に関する発言が全体の34%にあたる19に減じたのは、発問の「大切なこと」に音楽外の発言が含まれたことに因る。音楽の構造と曲想や雰囲気に関わらせた発言は13%の7しか無かつたのも、同じく音楽外の発言が増えたためであろう。

5. 筆者による考察

前節の分析でわかるように、“音楽を形づくっている要素”の中でも、子供達が気付くことができるのは強弱と速度(テンポ)に関わるものが大部分を占めており、その次に音色(楽器)とリズムに結びつくものが少し見られた。それ以外の要素(旋律、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ)に関連するのはほとんど現れることなく、“音楽の仕組み(反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係)”は無かつた。この結果から、気付くことのできる“音楽を形づくっている要素”には偏りがあり、今後、多様な要素を様々な音楽活動の中で子供達に意識させることが大切であることが明らかになった。音楽づくり以外の歌唱や器楽、鑑賞の活動の中でも、一つ一つ要素に注目させて気付かせたり感じ取らせたりする工夫が求められる。これに加えて“音楽の仕組み”については、「わらべ唄や手あそび歌、音楽あそび」などのプリミティブな音楽活動の中で、原体験として「反復、呼びかけとこたえ、変化」等の子供達を浸らせておくことが重要である。さらに教師は「わらべ唄や手あそび歌、音楽あそび」等の活動の意味や意義を理解し、その大切さを十分に認識しておく必要がある。

また音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との関わりに関する発言数は、教師の働きかけによって違いのあることがわかつた。本報告では、(1)「そうじの時間の音楽をきいて思ったこと」の授業記録と、(3)「そうじの音楽を考えるとときに大切なこと」の授業記録では、子供達に自由に発言させることで発言数は増えたものの音楽の構造と曲想や雰囲気に関する言葉は12~13%しか無かつた。しかし教師が積極的に問いかけた②「じょうねつたいりくをききながらそうじをして思ったこと」の授業記録には27%の発言があつた。これにより「○○が△△したから、□□に感じた」や「□□な雰囲気は、○○が△○△したから」等のような音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との関わりを捉えた発言とは、教師からの問いかけや導きが無いと子供達にはイメージ化は難しかったことが推察される。また今回の実践が3年生であつたため、発達段階的には具体的操作期以前の抽象的な思考の段階にあり、具体的な思考へ置き換えて考えることが難しかったものと思われる。

以上の結果を鑑みて、文部科学省学習指導要領にはどのような例が示されているのか、音楽の構造と曲想や曲の雰囲気に関わる発言例を抽出し整理しておきたい。これを分析することで、実際の授業では子供達に

どのような点に注目させ、どのようなことに気付かせればよいのか、その具体を知ることができる。

IV、『学習指導要領解説音楽編』に示された音楽の構造と曲想や曲の雰囲気に関わる言葉の例

子供達から導き出したいと考える音楽の構造と曲想や曲の雰囲気に関わる発言例について、文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』より抽出し整理しておく。

最初に、全体を通じて用いられている用語について確認しておく。

(1)「曲想」および「音楽の構造」について

『曲想』とは、その音楽に固有の雰囲気や表情、味わいのことである」p.27

『音楽の構造』とは、音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合いである」p.27

(2)「知覚」と「感受」について

この知覚と感受については、学習指導要領の〔共通事項〕において次のように記されている。p.25

「ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じとったこととの関わりについて考えること」

「イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること」

1. 第1学年及び第2学年について

第1学年及び第2学年の解説文より、「音楽の構造と楽曲の雰囲気や曲想」に関わる発言例を抽出する。

第3章 第1学年及び第2学年の目標と内容より「曲想と音楽の構造などとの関わり」

・A表現 歌唱

「楽しくお話をしている感じが伝わるように歌いたい」p.31ア

「動物がお話をしているような感じがするのは、旋律に呼びかけとこたえのようなどころがあるから」p.32イ

「楽しい感じがするのは、歌詞の中にいろいろな動物の鳴き声が出てくるから」p.32イ

・A表現 器楽

「飛び跳ねるような元気な感じが伝わるように演奏したい」p.37ア

「はずんで楽しい感じがするのは、スキップのようなリズムが何度も出てくるから」p.38イ（ア）

「鍵盤ハーモニカは、息を速く吹き込んだときとゆっくり吹き込んだときとは、音の感じが違う。ゆっくり吹き込むと優しい感じの音になる」p.39イ（イ）

・A表現 音楽づくり

「手のひらと手のひら、手のひらと握りこぶしというように、手の打ち方を変えると面白くなる」p.44ア（ア）

「手の打ち方を変えることで、いろいろな音が生まれて面白い雰囲気になったことを教師が具体的に伝える」p.44ア（ア）

「同じリズムでお話をしているようなところと、違うリズムでお話をしているようなところをつくったので、面白い音楽になったことを教師が具体的に伝える」p.44-45ア（イ）

「タンブリンは、打ったり振ったりこすったりすると、音の高さ、長さ、音色が違って面白い」p.45イ（ア）

「同じリズム・パターンを繰り返していく中で、音色を変えていくと面白さが生まれる」p.46イ（イ）

「体のいろいろな部分を手で打って出せる音を使い、友達と違う音を選んで順番にリレーのようにつなぐ」p.47ウ（ア）

「呼びかけとこたえを使い、一つの声部の呼びかけに、他の声部がこたえるように音楽をつくっていく」p.47-48ウ（イ）

・B鑑賞

「この曲の楽しいところは、トランペットとバイオリンがリレーのように何回も出てくるところ」p.50ア

「楽しく感じるのは、カッコカッコと同じリズムを繰り返して打っているのに、時々リズムが変わったり、途中からチリチリリーンという音が入ったりするから」p.51イ

・〔共通事項〕

『だんだん近づいてきた後、遠ざかっていく感じがしたのは、だんだん音が強くなった後に、だんだん弱くなったから』と捉えるなど、強弱の変化とその働きが生み出すよさや面白さ、美しさとの関係を考えることである」p.52ア

2. 第3学年及び第4学年について

第3学年及び第4学年の解説文より、「音楽の構造と楽曲の雰囲気や曲想」に関わる発言例を抽出する。

第3章 第3学年及び第4学年の目標と内容より「曲想と音楽の構造などとの関わり」

・A表現 歌唱

「2羽の鳥が呼びかけ合いながら遠ざかっていく感じが伝わるように、強く、やや弱く、やや強く、弱く歌おう」p.59ア

「のびやかで明るい感じになっているのは、同じリズムが繰り返されたり、となり合った音が続いている旋律の中で、時々上下に音が跳んでいて動きがあったり

するから。また、歌詞に紅葉で色づいた木や山の様子が描かれているから」p. 60 イ

・A表現 器楽

「前半の弾んだ感じと後半のゆったりした感じの違いを表したいから、前半はスタッカートで音を弾ませて演奏し、後半は一つ一つの音を滑らかにつないで演奏しよう」p. 65 ア

「ゆったりした感じから弾んだ感じに変わったのは、途中から(タッカ)のリズムが多くなったから」p. 66 イ(ア)

「長胴太鼓は、ばちを上げずに軽く打ったときと、ばちを高くはね上げるようにして打ったときとでは、音色や響きが違う」p. 67 イ(イ)

「リコーダーの指導では、トゥやティ、ルウ、トオなど、音の高さなどに応じたタンギングの仕方を身に付けるようにすることが考えられる」p. 69 ウ(イ)

・A表現 音楽づくり

「自分の工夫した音と友達の工夫した音を交互に鳴らして、音で会話をすると面白くなる」p. 73 ア(ア)

「異なる音の響きで会話することで、音の響きの組合せが面白くなり、よい雰囲気になったことを教師が具体的に伝える」p. 73 ア(ア)

「ウッドブロックとトライアングルを組み合わせると、音の高さや長さが違って面白い」p. 75 イ(ア)

「短い旋律を、呼びかけ合うようにつないでいくと面白さが生まれる」p. 75 イ(イ)

「ソランの三つの音を使い、一人一人が4拍で即興的に表現し、順番に旋律をつなぐ」p. 76 ウ(ア)

「反復と変化を使い、短いフレーズを反復させた後、変化させて、また最初の短いフレーズを反復させて音楽をつくっていく」p. 77 ウ(イ)

・B鑑賞

「この曲の一番面白いところは、真ん中で、たくさんの楽器が大きな音で激しい感じの旋律を演奏し、それが急に止まって最初に戻るところ」p. 79 ア

「堂々と行進する感じから、軽やかに踊っている感じに変わったのは、低い音の弦楽器の旋律と、高い音のフルートの旋律が交替で出てきたり、重なったりしているから」p. 80 イ

・[共通事項]

「『だんだん忙しい感じになってきたのに、急にのんびりした感じに変わったのは、速度がだんだん速くなった後に、急に速度が遅くなったから』と捉えるなど、速度の変化とその働きが生み出すよさや面白さ、美しさとの関係を考えることである」p. 81 ア

3. 第5学年及び第6学年について

第5学年及び第6学年の解説文より、「音楽の構造

と楽曲の雰囲気や曲想」に関わる発言例を抽出する。

第3章 第5学年及び第6学年の目標と内容より「曲想と音楽の構造などのかかわり」

・A表現 歌唱

「盛り上がるころは響きのある声で歌いたい。そのためには、3段目の最後のフレーズをだんだん強くして4段目の曲の山につなげよう」p. 88 ア

「おだやかで懐かしい感じになっているのは、同じリズムが繰り返されて滑らかな音の動きになっているから。また、歌詞にふるさとのことを思ったり懐かしんだりする気持ちが込められているから」p. 89 イ

・A表現 器楽

「主旋律と副次的な旋律が呼びかけ合ったり重なったりする面白さを伝えるために、主旋律が引き立つ強さで、副次的な旋律を演奏しよう」p. 94 ア

「主旋律と副次的な旋律との関わりを考えて楽器の組合せを工夫することで、二つの旋律が呼びかけ合っていたり、重なったりする面白さがよく表れるようになったことを教師が具体的に伝える」p. 95 ア

「落ち着いた感じから明るい感じに変わったのは、低い音域で旋律が繰り返されている前半に比べて、後半は旋律の音域が高くなり、音の重なり方が少しずつ変化しているから」p. 95 イ(ア)

「木琴や鉄琴は、打つ強さを変えたり、音盤の打つ場所を変えたり、マレットの材質や硬さを変えたりすると、音色や響きが変化する」p. 96 イ(イ)

「木琴や鉄琴の演奏では、表したい思いや意図に合った音色になるようマレットで打つ強さに気を付けたり、リコーダーの演奏では、音域や表現方法にふさわしい息の吹き込み方やタンギングの仕方に気を付けたりするなど、音色や響きに応じた演奏の仕方を身に付けるようにする」p. 98 ウ(イ)

・A表現 音楽づくり

「木、金属、皮などの材質の物から生じるそれぞれの音の響きを基に、『同じ材質の物から生じる音の響きだけでそろえて表現すると面白くなる』」p. 102 ア(ア)

「遠くから来た動物の群れが近づいた後、走り去っていくような音楽にしたいので、一つの楽器でゆっくり始めてからいくつかの楽器を徐々に重ね、中間の部分では、速度を速めて全員で音を出し、徐々に楽器を減らしながら弱くして、最後は一つの楽器で終わりたい」p. 103 ア(イ)

「トライアングルとツリーチャイムなど、同じ材質の打楽器を組み合わせると、響きがとけ合ってよくなる」p. 104 イ(ア)

「あるリズム・パターンを、変化させながらつなぐだけでなく、一人一人がずらしながら重ねると、やまびこのような感じがしてよさが生まれる」p. 105 イ(イ)

「同じ材質の楽器を用い、一人が即興的に表現した8

拍のリズム・パターンを繰り返して打つ間、友達が二人、三人と新しいリズム・パターンを重ねていく」p. 105 ウ (ア)

「反復と音楽の縦と横との関係を使い、複数の声部で、最初の部分は同じリズム・パターンを反復させ、中間の部分では、同じリズム・パターンを4拍ずらして重ねるようにし、最後の部分は、再び最初のリズム・パターンを反復させてつくっていく」p. 106 ウ (イ)

・ B鑑賞

「この曲は、はじめと終わりに打楽器の激しいリズムと金管楽器の力強い旋律が繰り返される生き生きとした音楽で、聴いていると、自分も前向きに取り組もうという気持ちになれるから好きだ」p. 108 ア

「ゆったりとしておだやかな感じから、動きのあるにぎやかな感じに変わったのは、尺八が旋律で箏が伴奏をしているような音楽が、真ん中では箏と尺八とが呼びかけてこたえているような音楽になっているから」p. 109 イ

・ [共通事項]

「強弱や速度の特徴を客観的に聴き取るだけでなく、『なんだか追いかけているような感じがしたのは、だんだん強くなるのと同時にだんだん速くなっているから』と捉えるなど、強弱や速度の変化と、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさとの関わりについて考えることである」p. 110 ア

V. まとめ

本報告で確認したのは次の4点である。

- (1) 子供の発言の中で多かった“音楽の構造”は、強弱と速度に関するものであり、僅かに音色とリズムに関するものもあった。しかし、旋律、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズに関するものは無かった。さらに“音楽の仕組み(反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係)”に関するものも無かった。
- (2) 気付きやすい“音楽の構造”には偏りがあることから、様々な音楽活動の中で子供達に注目させて、気付かせたり感じ取らせたりする工夫が求められる。また“音楽の仕組み”は、わらべ唄や手あそび歌、音楽あそび等のプリミティブな音楽活動の中で、原体験として子供達を浸らせておくことが大切である。また教師も、その活動を子供達に経験させる意義や意味、活動の目的を理解しておく必要がある。
- (3) 「〇〇が△△したから、□□に感じた」や「□□な雰囲気は、〇〇が△△したから」等の音楽の構造と曲想や曲の雰囲気との関わりを捉えた発言は、教師からの適切な問いかけや導きが無いと子供達だけの話し合いの中からは現れにくい。

- (4) 具体的操作期以前の抽象的思考の発達段階にある子供には、教師の板書による議論の視覚化が効果的であった。子供の発言の中からポイントを抽出して板書したり、対峙する意見を分かりやすく結びつけて整理したりすることで、議論の方向性や足跡、個々の発言の関係性等を具体的に捉えることができていた。さらにこの視覚化された板書を見ながら“ふり返りカード”を書くことで、その日の授業ではどのような活動をして何を学んだり身に付けたりしたのか等を、子供達が把握する一助にもなっていた。その板書例を文末に載せておくので参照されたい。

以上の4点は前報告で確認してきたものとも重なることから、その対応策を具体的に検討することが今後の課題であろう。最後になったが、研究実践を提供していただいた愛知教育大学附属岡崎小学校と同校の安藤朗広教諭へ、心より謝意を表しておきたい。

【注】

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』、東洋館出版社、2018
- (2) 新山王政和、河田愛子「小学校音楽科における思考を伴った試行錯誤による『音楽づくり』の活動—ICT機器を活用して「共創」を模索した試行実践(その1)—」、『愛知教育大学研究報告』、第68輯、2019
- (3) 新山王政和、小瀬木崇「小学校音楽科における思考を伴った試行錯誤による『音楽づくり』の活動—ICT機器を活用して「共創」を模索した試行実践(その2)—」、『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』、第4号、2019
- (4) 新山王政和、安藤朗広「小学校音楽科における思考を伴った試行錯誤による『音楽づくり』(3)—表したい思いや意図に向かって創り上げていく活動—」、『愛知教育大学研究報告』、第69輯、2020
- (5) 臼井学氏が、平成30年度愛知県音楽教育研究会で行った講演資料及び筆者による聴講メモより。

[授業者による板書] 話し合いの内容と足跡を可視化することで、共有や共通理解が促進される

